



若者とヒトデ

鍋島直樹 龍谷大学文学部教授

新堀いづみ看護部長は、横浜厚生病院でホスピスナースをしたことが縁で、

緩いケアに携わり、あそかビハール病院の看護部長として勤めている。健康をめぐり医療界で、あそかビハール病院の理念「ぬくもりとおかげさま」に彼女は心魅かれた。ビハールの理念「ぬくもりとおかげさま」が、病気の治療と快復をめぐり、心のぬくもりを育むことを大切にすると感じたからである。あそかビハール病院の基本理念は、「この示されている。

願われないのちに共に生きるひびきに、仏の慈悲に照らされている「ぬくもり」と「おかげさま」の心で、あそかの医療を実践します。

「ビハール」とは、サンスクリット語で「精舎・僧院」「心身のやすみ」。「休息の場所」を意味する。一九八五年に田宮氏が「仏教を背景とした終末期医療施設」として「ビハール」を提唱し、一九九二年に長岡西病院ビハール病棟が設立され、ビハール僧が患者の心のケアを実践してきた。一九八七年から浄土真宗本願寺派で「ビハール活動者」養成研修をつづけ、医療と社会福祉と仏教との協力しながら患者の全人的

苦痛を和らげ、その人らしく最後まで生きられるよう支援してきた。近代ホスピスの始まりは、アイルランドのメアリー・エイクケンヘッドによる。ナンチンゲールは「私たちにできることは手でみることである」と語っている。日本仏教における病院や社会福祉施設の起源は、『四天王寺縁起』によれば、聖徳太子が四天王寺を建設するにあたり、「四箇院の制」をとったこと由来する。四箇院とは、敬田院、施薬院、療病院、悲田院の四施設をさす。敬田院は寺院、施薬院は薬局、療病院は病院、悲田院は病者や身寄りのない老人などためる。社会福祉施設にあたる。新堀看護部長は「思いは過去ではない、今を生きている糧である」という言葉を紹介し、患者と家族に「ぬくもりとおかげさま」という幸せを感じられるようなケアをめざしている。彼女は写真療法家でもある。からだを思うように動かない患者でも、シャッターを押すわずかな力があれば、写真を撮ることができる。あそかビハール僧がきれいな虹を放った。患者が同じ方向に目を向けてシャッターを押した。その写真には空にかかると幻想的な虹が写っている。

人生の終末において、患者にとって心の支えとなるのは、主に家族や医師、看護師である。僧侶が病院に来ると、「何かあったの?」と尋ねられることが多かった。花岡ビハール僧は、自分身の無力さを知りつつ、医療スタッフと共に患者のためにこのまじなごとのことを考えた。仏教において苦しみ、思い通りにならないことであり、「不如意」を意味する。僧侶の役割は、意味を与える存在である。ビハール病院には、ビハールホールという阿彌陀如来を安置した仏間がある。言に言えない気持ちのまま仏様と相談できる空間である。

「悲しみは悲しみを知る悲しみに救われ、涙は涙にこそがれる涙にたすけられる。」(金子大栄『歌集抄』) 花岡ビハール僧は、

奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。

奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。

奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。奈良の住職であり、あそかビハール病院常駐僧侶として、患者と家族を医療スタッフと共に支援している。

となす。手料理のラーメン、スワイガー、たこ焼き、季節を感じる鮎、鱧、鰻。中節でも、たこ焼きは流動食にもなり、患者にとつておいしくて栄養になる。京都の本格的なお寿司屋に頼んで、鯛や鰯のお刺身の豪華な盛り合わせをふるまったこともある。大嶋院長は自ら、患者たちにお刺身を届けた。

「時間の長さではなく、その患者と家族の残された時間の人生設計を誤らないように支援する。先延ばしにしない。それが緩和ケアの姿勢である」と大嶋医師

若者が海洋の波打ち際に打ち上げられたヒトデを海に投げ返していました。太陽の光で乾いて死んでしまします。そのヒトデを見つけたと拾っては海にもう一度投げていました。通りかかった人が、「いくら投げてても世界中で何千何万のヒトデが波で浜辺に打ち上げられ、太陽の光で死んでしまします。」(二つのヒトデを海に投げ返しても、それは意味のないことだ。」「若者に話しかけました。すると若者は、「でも私の手の中のヒトデにとっては意味のあることだと答えました。そして、若者はまた一つヒトデを拾って海に投げ返しました。

合理性を重視する世間の価値観からみれば、「手の中のヒトデ」を海に投げ返して助けても、多くのヒトデは救えないから意味のないことである。しかし、計算などいらない慈しみの心からすれば、「手のなかのヒトデ」は、比べられないたった一つの尊い命である。「手の中のヒトデ」、それは、不思議にも縁があったてであった患者一人ひとり

いその患者自身のために、大嶋院長は、医師、看護師、ビハール僧、栄養士らとチームを組んで緩和ケアにあたっている。「手の中のヒトデ」を大事にする姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」でかけがえのないその人に寄り添う姿勢を体現している。緩和ケアと仏教の融合をめざす、大嶋院長たちのハートをかから誇りに思う。

大嶋院長は、医師、看護師、ビハール僧、栄養士らとチームを組んで緩和ケアにあたっている。「手の中のヒトデ」を大事にする姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」でかけがえのないその人に寄り添う姿勢を体現している。緩和ケアと仏教の融合をめざす、大嶋院長たちのハートをかから誇りに思う。

大嶋院長は、医師、看護師、ビハール僧、栄養士らとチームを組んで緩和ケアにあたっている。「手の中のヒトデ」を大事にする姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」でかけがえのないその人に寄り添う姿勢を体現している。緩和ケアと仏教の融合をめざす、大嶋院長たちのハートをかから誇りに思う。

大嶋院長は、医師、看護師、ビハール僧、栄養士らとチームを組んで緩和ケアにあたっている。「手の中のヒトデ」を大事にする姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」でかけがえのないその人に寄り添う姿勢を体現している。緩和ケアと仏教の融合をめざす、大嶋院長たちのハートをかから誇りに思う。

大嶋院長は、医師、看護師、ビハール僧、栄養士らとチームを組んで緩和ケアにあたっている。「手の中のヒトデ」を大事にする姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」でかけがえのないその人に寄り添う姿勢を体現している。緩和ケアと仏教の融合をめざす、大嶋院長たちのハートをかから誇りに思う。

大嶋院長は、医師、看護師、ビハール僧、栄養士らとチームを組んで緩和ケアにあたっている。「手の中のヒトデ」を大事にする姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」でかけがえのないその人に寄り添う姿勢を体現している。緩和ケアと仏教の融合をめざす、大嶋院長たちのハートをかから誇りに思う。